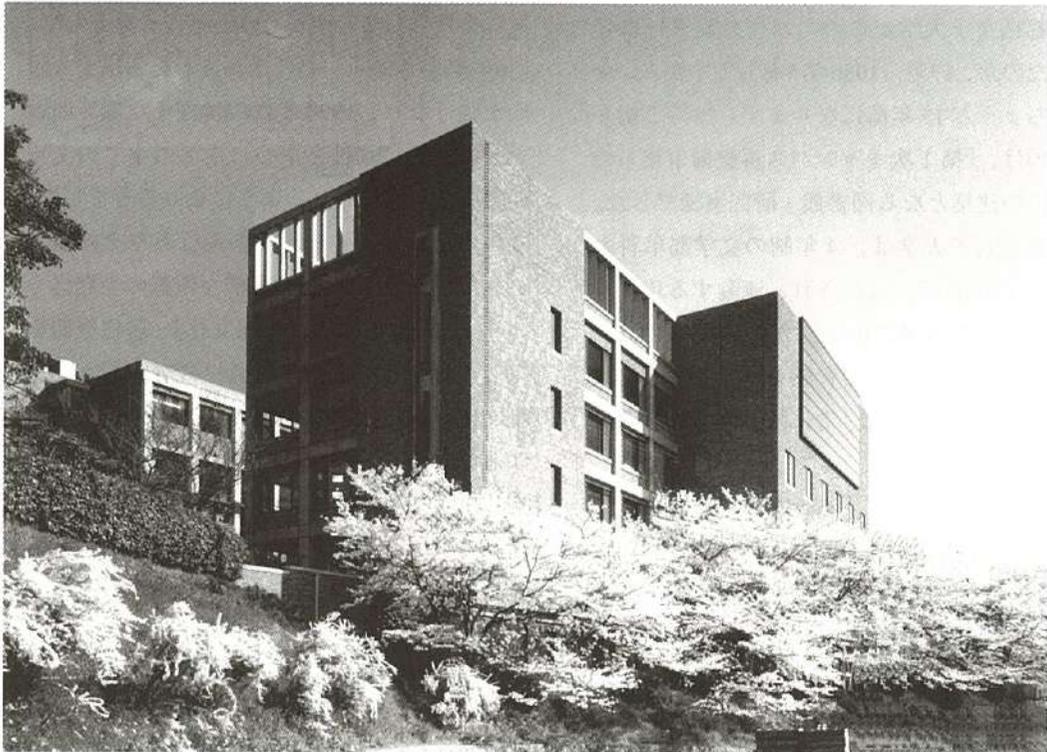


アルパック ニュースレター

VOL. 107

発行 / 2001年
5月1日

ISSN 0918-1954



京都橘女子大学「清風館」(本文中に関連記事があります)

目次 contents

- ・ 21世紀は女性が文化の担い手 2
- ・ 名古屋芸術大学美術学部デザイン棟II
「NUA・School of Design」が完成しました 4
- ・ 街なかのいい(さじ)加減な空間 6
- ・ 「まちなみ住宅」設計コンペで優秀賞 8
- ・ 「京北のいえ」モデル住宅展示場がオープン 9
- ・ 住吉西保育園と淀白鳥保育園の増築・改修工事が
完成しました 11
- ・ いくつかの「きっかけ」と関心の深まり 12
- ・ 韓国ソウル市の交通事情 13
- ・ 編集後記 14
- ・ メディア・ウォッチ 15
- ・ まちかど 16

21世紀は女性が文化の担い手 —京都橘女子大学「文化政策学部・清風館」が竣工しました—

〔大阪事務所／高坂 憲治〕

2001年4月、京都橘女子大学に新学部「文化政策学部」が設置され、第1期生を迎えてその新たな歴史がスタートしました。

京都橘女子大学がこのニュースレターに登場したのが、17号（1986年5月）ですから、今からちょうど15年前になります。当時ご紹介したのは、「第1次キャンパス再整備事業」の3番目の建築となる図書館・研究室棟でした。

京都橘女子大学は、4年制の文学部単科大学として1967年に設置され、流動する現代社会の多面的な要請に応え、かつ未来を展望できる「自立した女性」の育成を一貫した教学目標に掲げ、そのもとに、常に教学環境の整備に努めてきました。

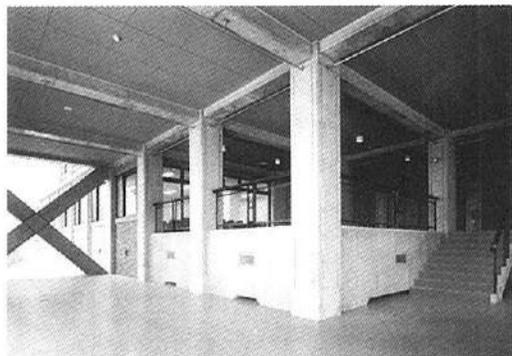
1978年に始まった「第1次キャンパス再整備10カ年計画」では、既存学舎の解体と共に一般教室棟（清和館）、体育館、図書館・研究室棟、管理特別教室棟、学生会館（リバティホール）を整備し、1991年からは「第2次キャンパス再整備」として、第2教室棟（清心館）、文化財学科棟（清史館）を整備してきました。この間、日本では立ち遅れているとされた女性史や女性文化の研究に取り組み、その成果として、1992年「京都橘女子大学女性歴史文化研究所」を開設し、さらに、1997年、古都京都にふさわしい文学部文化財学科を増設して、まさに現代社会における文化の担い手としての女性の育成のために、施設・設備整備と

共にその内実化に努めてられました。

さて、戦後の高度経済成長はこの国を経済大国に発展させ、物質的な繁栄と利便性を国民にもたらしましたが、1980年代を境として、「物の豊かさから、心の豊かさ」を希求する傾向が強くなり、1990年代には様々な環境問題を含め、特に女性を中心に生活の中での文化の重要性が注目されるようになってきました。これらは、個人の表現や創造行為やその鑑賞としての「芸術文化」、多様な情報の受発信やネットワークによる「情報文化」、居住空間をはじめとする都市や農山漁村の空間的な「環境文化」等、生活を取り巻く様々な問題に共通する横断的な概念として認識されています。京都橘女子大学では、21世紀をこのような文化の時代としてとらえ、その担い手の育成を目的として「文化政策学部」を設置することとしました。

「文化政策学部」は、文化政策を「公共政策」、「経済・経営」、「文化開発」の3つの側面から総合的に研究教育しようとするもので、<文化プランナー>、<文化アナリスト>、<文化プロデューサー>という3つの専門的職域を担う能力の習得を目標としています。そのために、新しい教学環境としての器が必要となり、新学部棟を整備することとなりました。

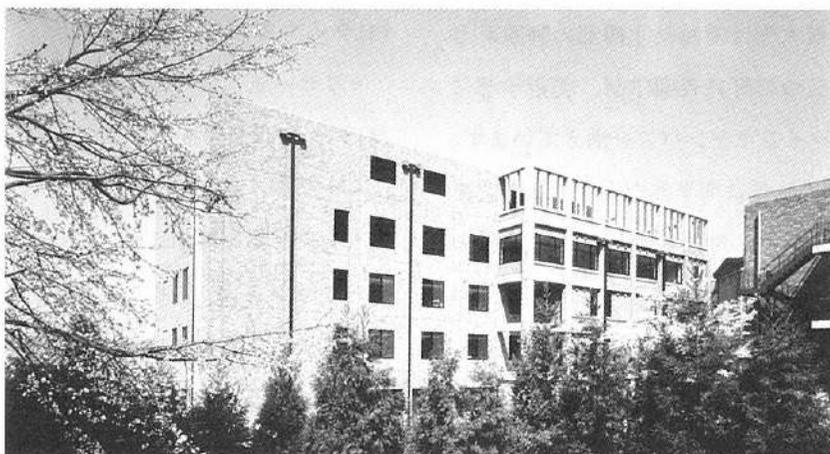
洛東音羽山の麓にあるキャンパスは、緑豊かな環境の中であって、若干手狭であること



1階アートスペース



研究交流スペース



木立の中の清風館

から、新学部棟は駐車場として利用されていた調整池の上に建てることにしました。

調整池の機能を残した1階のピロティは、学生達が自由に使えるアートスペースとしました。できあがった施設をご覧になったある先生は、ここに座布団を敷いて講義ができるとおっしゃいました。どんな講義になるか楽しみです。また、アートスペースと連続している部屋は、学生が24時間世界中の情報を手にしながら利用できることを意図しています。

2階には、この大学の特徴でもある、女性歴史文化研究所、文化政策研究センターを配置し、リエゾン機能をもった研究交流スペースと一体的に活用されます。

3・4階には研究室、共同研究室を配置し、5階には全学が利用する大教室と製図などの実習を行う実習室を配置しています。

新学部棟は、文化がテーマです。伝統的な文化、環境文化、情報文化等が建築自身の中に表現されることを目標としました。研究室の廊下の天井には日本の伝統色を用い、大教室の大きな開口部から入る西陽を遮るために障子を取り入れました。また、大教室の廊下の天井は青い空と白い雲、床は緑豊かな大地と、生命の源である海をモチーフとしてデザインしました。

私達は、日常の仕事の中でまちづくりの多くの部分で女性が主役となっていることを実感しています。21世紀、この大学から多くのまちづくりの主役が巣立って、活躍してくれるのが楽しみです。



大教室



5階廊下

名古屋芸術大学美術学部デザイン棟Ⅱ 「NUA・School of Design」が完成しました

〔名古屋事務所／間瀬 高歩〕

名古屋芸術大学は愛知県北西部の師勝町と西春町との二つの町に音楽学部、美術学部に分けられたツインキャンパスを構えています。本大学は昭和45年に両学部を有する私立芸術大学として誕生し、増設等を行いつつ今日の姿に至りました。美術学部は西春町のほぼ中央部に位置し、周辺は住宅地、小学校、田畑等、都市郊外の景観が広がっています。

平成13年2月、本美術学部キャンパスにデザイン棟Ⅱが竣工しました。デザイン棟Ⅱは平成13年度から美術文化学科の新開設に伴うキャンパスの再編成に向けて建設し、主にデザイン科が活用する多様なデザインの研究・創造・発信のための施設です。

デザイン科は1学年175人の学生数を有し、各専攻は以下の4つから構成されています。

(1)メディア&コミュニケーションデザイン

- ・造形実験、ビジュアルデザイン
- ・デザインプロデュース等

(2)道具・空間デザイン

- ・プロダクトデザイン、スペースデザイン
- ・ヒューマンエンバイロメントデザイン等

(3)ライフスタイルデザイン

- ・リサーチ、ファッション・フード等

(4)クラフトデザイン

- ・メタル、セラミック、テキスタイル等

うちデザイン棟Ⅱは主にメディア&コミュニケーション専攻、ライフスタイル専攻、クラフト専攻の利用目的を中心に構成されています。

人が行き交うデザイン棟の中庭

「NUA・School of Design」と名づけられたデザイン棟Ⅱは既存棟・各種工房との機能連携を考慮した低層3階建てとしています。また、周辺のまちにとけ込む親しみやすさと開放性のあるキャンパス景観を継承しつつ、オープンスペースや緑地を再整備し、新たなキャンパスの環境づくりを進めてきました。本棟のエントランスは2層吹抜となるホールがあり、中央部には外部吹抜となる中庭を設けています。中庭は新しい出会いとコミュニケーションを育むデザイナーズスクエアとして様々な作品展示、講評会、大学祭、デザインイベントなどに活用できる、人が行き交い賑わいのある空間です。



デザイン棟Ⅱ（東面外観）と開放的な広場



樹高7mのヤマモミジを植えた吹抜の中庭

施設機能構成と専攻毎のまとめ

1階には多様な素材加工を行う共通工房をはじめクレイ・プラスチック工房、ジュエリー工房、テキスタイル工房、ゼミ室を配置しています。また、衣・食・住にわたる暮らしの文化を学び、伝えるデザイン実習のためのキッチン工房、和室・茶室を設けています。

2階にはデザイン科の中核となるブロック合同教員室・事務機構、大学院室をはじめ、メディアに関連する設備を充実したデジタル工房、スタジオ、ゼミ室を配置しています。館内は全室LAN設備を設け各室間との情報通信ができ、将来への対応として別棟とのLANネットワーク構築が可能なように準備しました。

3階にはライフスタイル教室、1年生実技教室を配置。実技教室（8室）は可動式間仕切りを開閉することで、実技内容に合わせて教室の広さを自由に調節することが可能です。

外構の植栽はキャンパス景観との連続性を高めつつ、四季を通して花や実を楽しめる樹木とテキスタイルの染料にも活用できる有用植物の混植としています。



デザイン科の中核となるブロック合同教員室

キャンパスライフを彩る施設の実現へ

建築意匠は学生・教職員の作品が映え渡るようにコンクリート打放しと洗い出し仕上げを構造体にあわせて簡潔にまとめ、内装は集成材、シナ合板等を使用し木目を活かしつつ暖かみのある室内空間としました。

本設計・監理はキャンパスマスタープランからお手伝いをさせて頂いておりましたが、当初から建物が主張しすぎない、シンプルかつ明快なデザイン棟を意図していました。奇をてらう建物造形をつくるのではなく、本芸術大学においては明確な建物構造、利用しやすい間取りと設備配置、シンプルかつ素材感を活かした教室群、吹抜の中庭のあり方に主題を置くこと。それが学生・教職員のデザイン活動を通して生まれる日々の出来事や無限の場面がつけられる空間のあり方。豊かなキャンパスライフを彩る施設の実現へ向けて結集した我々の想いでした。

デザイン棟Ⅱが今後「NUA・School of Design」の名のごとく、新しい次代を担うデザイナー・クリエイターを育み、社会へ発信する母体施設として学生・教職員、地域の皆様に親しまれ、末永く活用していただけるよう期待しています。

最後に誌面で失礼ではありますが、御指導を頂きました関係者の皆様、休みなく毎夜遅くまで建築工事を進められた施工業者・職人の方々に深く感謝すると共に、建築主である学校法人名古屋自由学院ならびに名古屋芸術大学の益々の御発展を心より願っております。

街なかのいい（さじ）加減な空間 ワークショップ方式を活用した暫定ポケットパークの整備

〔大阪事務所／中塚 一〕

街なかのいい（さじ）加減な空間

ニュースターで何回か紹介させていただいていますが、大阪府泉州地域の高石市の駅前では、現在、土地区画整理事業と密集住宅市街地整備促進事業とを活用した「密集市街地の再生を目指したまちづくり」が進められています。今回は、密集事業で先行買取りされた空地を活用した暫定ポケットパークの整備についてご紹介します。ポケットパークは、子ども会によるワークショップ方式による計画づくりと自治会や子ども会などによる一部自力建設型で、街なかの「いい（さじ）加減な空間」として完成しました。

暫定ポケットパークとは

駅前などの密集市街地で道路や公園などの基盤整備を面的に整備する場合、その種地を先行して確保する必要があります。先行的に売っても良いと協力していただける方から買取するのですが、一般的には金網で囲って入れないように管理されることが多く、まちのイメージを阻害してしまっています。

今回は、密集事業で小公園用地として買い取った土地を一時的にポケットパークとして開放し、地域の方々に利用してもらおうとの目論みです。

ワークショップ方式を採用するために

最近、公園等の整備においてワークショップ方式を取り入れた事例は、多くなってきて

いますが、現場ではまだまだ一般化していないのが現状です。住民や行政の中に、「やってみよう」という方がおられても、まだまだ行政の窓口では「それなに？」といった対応や、行政内部で予算や承認を取っていく際に「そんな手間のかかる事を」「新しい陳情活動になるのではないか」「市内全域で沢山要望が出てきたらどうするのか」「作った後の管理はだれが責任を持つのか」等々本格的な整備になればなるほど、失敗した場合のリスクや心配が積み重なり、なかなか実現しないのが現状です。今回のケースは、期間限定型の暫定整備であり、また予算もないなど、逆に地域の方に参加、協力していただき一緒に整備・管理をしていくしかないという好条件(?)に恵まれています。

ワークショップ方式による計画づくり

さて、まずは、計画づくりですが、全体で5回のワークショップを行っています。

第1回は「敷地と周辺を知ろう」をテーマとした現地見学と現在の遊び場マップづくり。現地見学では、縄ひもを利用して10mの円を描けば、どの程度になるか、周辺はどんな建物が建っているかななどを体感しました。その後、子ども達が今、どこでどんな遊びをしているのかを大きな地図に書き込みました。宿題は、おじいちゃんやおとうさんの子どもの時にどこでどんな遊びをしていたかです。



どんな遊びがしたいかな



ブランコも欲しいよね（起こし絵ワークショップ）



赤い花はどこに植えればいいのか

第2回は「イメージをふくらませよう：まちにはどんな公園があるといいかな」で、カードと写真を利用してどのような活動や遊びが公園でしたいかを話し合いました。このワークショップでは、子ども達の「遊具を使って遊びたい」という意見と、大人達の「なにもない原っぱで自由に」という意見とに大きく分かれました。ファシリテーターのやや強引な進行で、3カ所ある広場をそれぞれ遊具を置く空間と原っぱの空間とに分けてはどうかとの提案で概ねまとまりました。

第3回は「空間イメージをつくろう：起こし絵で空間イメージを表現しよう」で、再度、現地で大きさ確認ゲームをしてから、キットを使って起こし絵を作りました。

最後の第4回では、これまでの成果をまとめた特大模型のお披露目です。子ども達から再度、遊具の要望が出て、今後、予算を検討してできる場所は案に取り込むことでまとまりました。その後、冬の工事まで約半年間あるため、夏のあいだに咲くひまわりの種を植えました。ひまわりはすくすくと成長し、高石二世の種がたくさんでき、公園の完成をめざし、冷蔵庫で次の出番を待ちました。

自力建設型への試み

自力建設型の工事に際しては、テストピースを利用した縁石、大阪府の無償配布制度を

利用した樹木、鉄道の枕木を利用した花壇、ライオンズクラブ贈呈のベンチなど、材料も予算がない中で、色々な知恵と地域のネットワークで集まってきました。当日、総勢約40名による工事は、高い木はお父さんたちに任せ、低木や花壇はご婦人と子ども達が植えました。

地域自主管理への試み

できあがった公園は、一般的には公園関係の課が管理するので、どうしてもこれまでの一律の管理から抜けきれませんが、今回は、「暫定利用」ですから市街地整備を担当する部署が管理しています。また、ワークショップに参加された周辺にお住まいの方が日常的に散水していただいているようで、少しずつ地域の方々が自主的に管理しはじめています。これも「いい(さじ)加減な空間」の一面です。

ドラえもんや自分の記憶でも

そういえば、ドラえもんのび太君達も、普通の公園ではなく、土管等の資材が野積みされた原っぱで遊んでいますし、自分の体験でも、公園ではなく資材置き場でやんちゃをしていたのが記憶に残っています。昔はそんな「いい(さじ)加減な空間」が街なかに残っていました。

「公」の空間のあり方

これまでは、公園や道路等は「公共施設」として、行政が全て計画し管理する、住民は都合の悪いところの文句をいうという関係がほとんどでした。しかし本来は、「公」の空間は皆で負担(税金、寄付等)してつくり、皆で管理(管理代行としての行政、地域等)し、皆で使う(地域、個人等)という「原点にもどる」ことが大切ではないかと考えています。

さて、遊具がない「いい(さじ)加減な空間」の子ども達の感想は…

「まちなみ住宅」設計コンペで優秀賞

—地域資源を活かし、地域住民と協働し、地域のまちなみに貢献する住宅—

〔京都事務所／嶋崎 雅嘉〕

新しいタイプのコンペ

先日、都市居住推進研究会と（財）京都市景観・まちづくりセンターの主催により、12戸の住宅を対象とした「まちなみ住宅」設計コンペが開催されました。

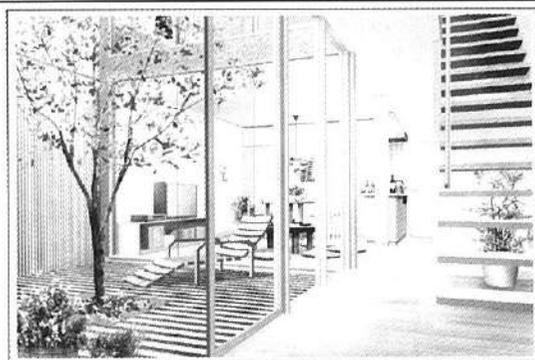
このコンペは、従来の審査方法とは異なり、提案・審査の課程で、地域住民をはじめ、住宅の取得を希望する市民、住宅開発事業者、学識経験者などの参加する交流会を開催して、地域の相互理解を図った上で、広く公開して審査を行うという全く新しいタイプの方式で実施されました。

計画地は京都市右京区にある太秦という地域で、農地がまだ残る一方で徐々にミニ戸建て住宅地の開発が進む地域です。

今回の提案条件は、戸当たり100㎡強の敷地面積ですが、いかに地域特性を活かしたまちなみと、地域との交流を可能にする環境を計画するかが問われました。

季節と暮らしが織りなすまちなみ

アルバックチームの提案内容は、個性ある暮らしを実現する「私的空間」と、隣同士やご近所との交流が生まれる充実した「交流空間」の組み合わせをDNAとし、十二単のように時間を重ねながら、家族や生活形態の変化に対応



中庭イメージ

できる可変性に配慮した住まいとしています。

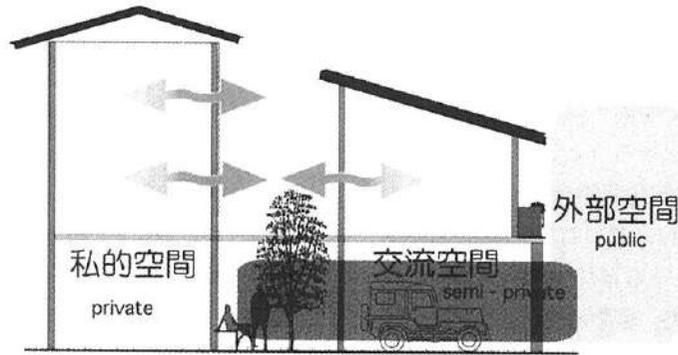
特に、「交流空間」として全住戸に設けた中庭は、狭小な敷地という条件の中で風通しや採光を十分にとりいれるとともに、食事や趣味の場としての使い方や中庭をはさんだお隣との共同での利用についても提案し、審査員の方に個性ある暮らし方をイメージしてもらえたのではないかと思います。

また、太秦地域の特性を、農地や庭の自然から感じる季節感と、通りにあふれ出す人々の暮らしのにおいが織りなされて、暮らしやすく落ち着いた雰囲気醸し出していると読みとりました。

今回の12区画の住まいが創り出すまちなみにおいても、季節感あふれる花の咲く落葉樹を配置するなど季節毎の表情をつくるとも



イメージパース



中庭のある暮らしイメージ断面図

に、自然素材を活用した外壁や格子戸などの導入により、暮らしの個性が通りににじみ出す落ち着いたまちなみをめざしました。

アルパックの提案が優秀賞を

このコンペには、百十数チームが作品を提出し、第1次審査を通った23チームが、太秦小学校で審査員にプレゼンテーションを行う時間を与えられ、その場で、公開審査会が催されました。各審査員による4回の投票により、アルパックチームは2等に入り優秀賞をいただくことができました。

今後の民間開発のモデルとなるか

今回のような、地域住民と開発事業者、設計者が交流してまちなみを考えていく取り組み

が、全国で徐々に広がっていると思います。

経済性一辺倒の開発ではなく、周辺住民との交流と相互理解のもとに、地域の風土や歴史を読みとり、周辺環境に調和した建物やまちが創られる流れが、今後の主流となることが期待されます。

私たちにとってコンペという場は、通常の業務以外の場で、独自の提案や新しい考え方を示すチャンスの場合でもあり、今後も機会があれば積極的にチャレンジしていきたいと思っています。

(コンペ参加者：京都事務所／石本、松木、嶋崎、山崎、永濱)

きんきょう

近況報告!

「京北のいえ」モデル住宅展示場がオープン

〔京都事務所／中嶋 秀介〕

国内産木材需要の落ち込み

全国的に国産材の需要が低迷し、その販売額は年々低下しています。この原因として、直接的には国産材が安価な外国産材に押されていることや、バブル経済の崩壊による景気の落ち込みも影響しているようです。

平成9年度京都府内製材用木材の流通状況を見ると、京都産木材の総出荷量75,000 m³のうち、京都府内での受け入(木材入荷量)は

48,000 m³、他府県から京都府内に入ってくる国産材入荷量は9,000 m³であるのに対し、外国産材は国産材の約6.5倍にあたる367,000 m³が入荷しています。

また、近年、戦後の林業政策で大量に植林された杉の間伐材が大量に発生し、さらに長伐期をむかえる産地もでており、供給過多による値崩れ現象も起こりつつあります。

京北林業 21世紀活性化戦略

京都北山と並び、磨き丸太などの銘木を含めた杉の産地として知られる京都府北桑田郡京北町でも木材の販売額は平成元年頃をピー

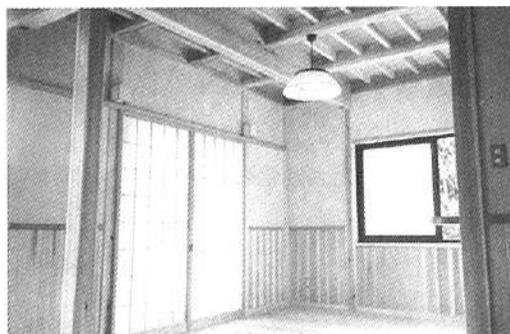
クに年々減少が続いています。

このような背景のなか、森林資源に対する需要動向を分析しそのニーズ把握を行いつつ、地元林業の活性化を図ろうと、平成11年より京北林業21世紀活性化戦略会議が始動しました。この戦略は、(1)京北の自然に調和した木材産地にふさわしい木造住宅を研究開発し、いわゆる「産直住宅」産業の事業化、(2)豊かな自然環境、京都都市圏へも通勤可能な立地条件を活かし、京北町ならではの木造住宅による住宅団地の整備、(3)町内の森林資源、林産物などのネットワーク化を図り、林業のまち京北をアピールする森林フィールドミュージアムの形成、を3本柱とするもので、林業活性化からイメージアップ戦略、定住政策などへの展開がすすめられているところです。

産直住宅「京北のいえ」の研究開発

産直住宅としての「京北のいえ」は、地場産材を使い、地元職人が心をこめてつくる木造軸組の住宅で、次の特徴をもちます。

- (1)林業千年の伝統技術が育んだ京北の杉、桧をふんだんに使い、地元の気候・風土に熟知した職人が心をこめて造る。
- (2)地元職人の伝統技術と、新しい技術であるプレカット工法[®](3セク事業の京北プレカット)を取り入れ、高品質、高耐久性をもった安心・安全の住まいを供給していく。
- (3)木材の供給から設計・施工、アフターメンテナンスまで、一貫したサービス体制を構築し、納得のいく住まい造りをすすめる。



内装仕様：木の温もり、香りがただようやすらぎの仕様

(4)木の温もりや優しさを活かし、山村風景になじんだデザインで、自然いっぱいの外部環境を取り入れたプランを住む人の条件に沿って提案していく。

「木を見て、さわって、プランを練って」、そして住む人の個性と職人の技術が光る。そんな住まいづくりを進めるために、昨年末、地元工務店や大工さん、製材所など20余名が集まり、ビルダーズグループ「京北のいえを創る会」準備室が発足しました。次のステップとしてこのネットワークを拡げ、木材供給システムの安定化、迅速化を図っていくことも必要になってきています。

「京北のいえ」モデル住宅の建設

「京北のいえ」はブランド住宅として、一般住宅市場への参入が想定されています。このためには一定の規格・性能基準を備えた標準ディテール、標準プラン、標準販売価格などを準備しておく必要があります。

京北のいえモデル住宅1号棟は、これらのデータを得るためのいわば実験住宅として建設が進められ、5月に竣工の運びとなりました。構造・仕上げともに京北産の杉材をふんだんに使用し、その他の素材にも珪藻土や漆喰等の自然素材が中心に使われています。木造本来の力強さとやすらぎを感じる空間に、これまでその工芸的価値により床柱としての利用が主であった、絞り丸太や磨き丸太の活用範囲を広げ、独特の趣を住まいのなかに与えています。

住みたい人と建てる人とのネットワーク

京北に住みたい人、京北のいえに関心のある人はぜひ一度、「京北のいえ」モデル住宅展示場をのぞいてみてはいかがでしょうか。

連絡先は京北のいえ展示場内「京北のいえを創る会」事務局(Tel.0771-53-8990)。

※CAD(コンピュータ自動設計)とCAM(コンピュータ自動製造)の一元化による一貫したオートメーション木材加工システム

住吉西保育園と淀白鳥保育園の増築・改修工事が完成しました

〔京都事務所／前田 怜嗣〕

私には子どもがいないので仕事でもなければ保育園に行くことはないのですが、働きながら子育てしている人がまわりに沢山いるので、保育の話は私にとって身近な話題の1つです。友人の中には、映像関係の仕事をしていて里親制度の民間保育園へ子どもを預けているうちに、その園の福祉法人設立と許可保育園設立の運動の渦に入り、並々ならぬ力を傾注し、結果、保育園完成までこぎつけ、さらに、保母さんに仕事を転換するまで保育園の魅力に取りつかれてしまった者もいます。

さて、普段、90%がオッチャンと仕事をしている私が、保育園に行きつて一番に感じるのは、保育園へ行くと気分が凄く明るくなることです。仕事で色々辛いことなんかがあったり、懸案事項で頭が一杯なときでも、打ち合わせなんかで、保育園の門をくぐると、そこには、明るくて、大きな声の「こんにちわ」っていう子ども達や保育士さんの声が耳に次々と入ってきて、少なくとも保育園にいる間はなんか救われた気分になるものです。園内で図面とメジャーをもってウロウロしていると、子ども達が寄ってきて「オッチャン、何やってるの」と質問せめにもあいますが、そういう時は「オニイチャンでしょ」と訂正し、説明するのです。

このほど京都事務所で担当した園は、2ヶ園で、偶然にも両方とも京都市伏見区の民間保育園です。伏見区は京都市内でも待機児が多い地区です。

1つは住吉西保育園で、我々が昭和60年に建て替え設計・監理を行った園で、もう1つは京阪電鉄淀駅からすぐにある淀白鳥保育園で昭和49年に建てられた園です。

事業の内容としては、既存の2歳児の保育室を増築し、1歳児からの受け入れを可能と

することで、待機児の緩和に対応しようというものです(住吉西保育園)。もう1つは保育室を増築し定員増を図り、既存建物の内部を改修し保育環境を向上させるというものです。事業は少子化対策臨時特例交付金と自己資金を活用して行われました(淀白鳥保育園)。

増築を行うにあたり、考え方として、(1)増築部が分らないぐらい一体化する、(2)増築部を旧建物との対比でみせる、(3)(1)と(2)の中間が考えられますが、住吉西保育園の方は(1)の考え方で、淀白鳥保育園の方は(3)の考え方で設計しました。住吉西保育園の方はいつも園に通っておられる人も、いつもとちょっと違うなというくらい旧の部分と一体化できました。淀白鳥保育園の方は、敷地条件が厳しく増築部を旧アプローチ通路に増築したので保育園の顔が少し新しくなりました。また、25、6年ぶりに内装も綺麗にしたので園の中に入ると新旧の区別が付きにくくもかもしれません。内部の色については、全体的には園長と主任、各室については担当の保育士さんに選んでもらい、我々が最終チェックして現場へ反映していきました。その結果、かなりインパクトのあるものとなりましたが、若いお母さんには、「かわいい」と評判らしいです。

最後に、保育園での工事は、お昼寝の時間に音のする工事ができなかったり、数々の行事の合間を縫ってと、条件が厳しい中、事故もなく完成できたことを関係者の方々に感謝致します。



住吉西保育園：尖り屋根の右側手前が増築部

いくつかの「きっかけ」と関心の深まり

〔大阪事務所／吉田 久視子〕

箕面市は、北摂山系の山々に屏風のように囲まれたまちです。山麓部（山裾）にいと、鳥のさえずりが聞こえ、かと思えば近くでひとの生活の音がする。そんな風に、自然と生活の場がとなりあった構造をしています。

その箕面市で今、山に関する一つの動きがあります。それが今回紹介する「箕面・山麓保全検討委員会」です。

昔、人は山に入って、生活の物資を得ていました。たとえば、ご飯をたくにも「へつついさん」に薪を使っていました。薪は、山から切りだしたものです。人と山との関わりは、切っても切れないものだったといえます。

でも、最近は人は山には入りません。山に入る必要がないからです。こんなに山々に抱かれている箕面のまちでも、箕面の滝にこそ人は訪れはするものの、いわゆる山麓部にはほとんど人は入らなくなっています。そのため、山は管理が放棄され、里山としての機能を失い、荒廃してきています。

箕面・山麓保全検討委員会は、そんな山を「保全」するために結成されました。ここでい



山の木を使った木工細工教室：丸太切り競争

う「保全」は、何もしないでおいておく「保存」ではなく、山を活用しながら守っていかうというものです。そして、もう一つ、山麓委員会の大きな特徴は、山林所有者と市民、行政の3者協働の組織だということです。山の自然を守りたいと思ってもそこには所有者さんがいます。市民と所有者、そして行政がお互い協力しあってこそできることなのです。

今回、山麓委員会では、「山の楽校・本日開校！」というイベントを開催しました。目的は、少しでも多くの人に山に関心を持ってもらいたい。そのきっかけになって欲しい、ということでした。

なにぶん、市民が主体的になって行っているイベントですから、足並みがそろわないこともあります。でも、それぞれが、できる範囲のことを、できる時間にやりました。昼間はサラリーマンをしながら、主婦業の傍ら、いろいろな参加の形がありました。予定していた講演者が突然キャンセルなどという局面もありました。でも、それだけにこのイベントはみんなの大きな力になったと思います。

イベントには、雨のせいか、思ったほど多くの人には来てもらえませんでした。でも、これ



山に関わる活動団体のパネル展示：ホームページを紹介



山にちなんだ楽曲の吹奏楽が終わりではありません。ようやく、「きっかけ」ができたのだと思います。これから、箕面に住む人が、少しでも山へと関心を持ち、山に関わってってもらえるように、山麓委員会は今後たくさんの「きっかけ」をつくっていききたいと思っています。

韓国ソウル市の交通事情

〔大阪事務所／澤田 英郎〕

現在、自動車交通問題への対策に頭を悩ませているのは、どこの国でも同じです。今回は、韓国ソウル市の交通事情と今後の展開について3/7～11日に行った現地視察、ヒアリング結果をもとに紹介したいと思います。

ソウル市の交通現況と交通政策

ソウル市には1,032万人（1999年、韓国の総



ソウル市の交通渋滞

人口の約23%)が生活し、近年モータリゼーションの進展が著しいです。例えば、自動車台数では、1981年の22万台から1998年には220万台と約10倍に増加し、現在の大気汚染の約85%が自動車の排気ガスとなっています。

一方、自動車交通対策では、道路整備（現在のソウル市の道路率：約21%、都市高速道路：170km）以外に、近年ではTDM政策（ロードプライシング、バスレーンの設置等）など多様な政策が展開されています。

公共交通網の現状

多様な政策を展開しているにもかかわらず、爆発的に自動車利用者が増加し続ける主要因として、まず、ソウル都市圏が抱える人口規模（約2,000万人）に対して鉄軌道が不足していることが挙げられます（下表参照）。

次に、ソウル市の交通機関分担率（2000年、輸送人員）は、鉄道：34%、自家用車：20%、バス：29%で、東京23区の鉄道：73%、自家用車：18%、バス：5%と比べて、バス交通が重要な役割を担っています。しかし、ソウル市には民間バスしかないことなどから、バス交通の充実した地域と不足した地域の二極化が進行したり、地下鉄と幹線バスの経路が同じであり、地下鉄利用者の多くがバスからの転換であるなど、公共交通全体が必ずしも効率

（単位 km）

	地下鉄	JR	私鉄
ソウル都市圏	328	171	-
首都圏	282	887	1,029
京阪神圏	165	502	774

注) ソウル都市圏の地下鉄には、仁川市の地下鉄約40kmを含む



ロードプライシングにおける料金徴収ゲートの的に利用されていない問題があります。

また、こうした問題以外に、(1)ソウル市と広域交通のミスマッチの問題、(2)住民意識の問題、(3)道路構造の問題など多様な課題を抱えています。先の課題の例としては、

(1)ソウル市内の都市高速道路が無料の反面、市外は有料である。市街化が拡大しているにもかかわらず、なかなか広域的な鉄道整備が進まない。急行列車がないなど。

(2)政策実行に対してソウル市長の持つ権限は大きいですが、選挙などの関係から、自動車交通にムチを与えるような政策は実現が困難であることなど。

(3)歩行者空間の整備不足から、近年交通事故が多発しており、大きな社会問題となっていることなど。

が挙げられます。

今後の展開

こうした状況に対して、ソウル市やソウル市政開発研究院（Seoul Development Institute）の方々は、郊外ニュータウンとソウル都心を直通で結ぶ鉄道と急行列車の整備、地下鉄駅へのフィーダー輸送を目的とした地域循環バスの促進など、公共交通機関の利便

性を高める政策を優先的に展開したいと話されました。

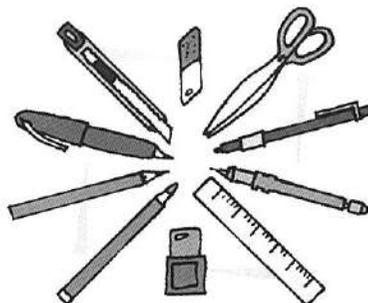
交通政策は、都市構造をも変革するため、ソウル市の将来を決定する最も重要なキーになると思われます。そうした中、公共交通の促進を目指す韓国の方々に共感を覚えるとともに、今後、我々も活発な情報交換を行い、韓国と日本の良い面、悪い面を相互に学びあいながら、それぞれの地域特性にあった交通体系を目指していきたいと考えています。

編集後記

■ニュースレターの近年のバックナンバー、最新号は、アルパックのホームページに載せています（PDFファイル）。是非、アクセスしてみてください。

（URL：http://www.arpak.co.jp/kouhousi_1_frame.htm）

■新年度を迎え、皆さんの住所等の変更がありましたら、同封のニュースレター宛先確認はがきもしくは、E-mail（info@arpak.co.jp）にて編集局までご一報をお願い致します。また、併せて皆さんのご意見・ご感想もいただければ幸いです。





「考える力 やり抜く力 私の方法」

- 中村修二著
- 三笠書房

中村修二さんをご存じでしょうか。私が中村さんの名前を知ったのは、2年ほど前で、その実績を理解し骨のある生き方に触れたのは、鶴橋の駅前にある本屋でこの本を手にしたごく最近のことです。

中村さんは1954年生まれで、徳島大学電子工学科の大学院修士を修了して、徳島県阿南市にある日亜化学工業という会社に入社しました。京セラに合格したものの、従業員が200名足らずの名もない小企業にあえて就職したわけです。中村さんは、貧弱な研究環境の下で、半導体の研究に従事し、周囲から冷たい視線を感じながら、金にならない分野の研究を続けました。「コンチキショウ、コンチキショウ」と言いながら、普通の研究者とは全く違った方法で青色発光ダイオードの研究開発にチャレンジしました。研究の先が見えず絶望のどん底に落ちながら、なにくそという気持ちを持ち続けて世界的な発明に辿り着いたわけです。中村さんのもとには、アメリカの有力企業や有名大学から好条件のオファーが幾つ

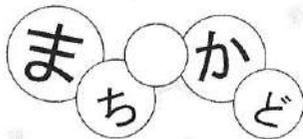
紹介者／大阪事務所 杉原 五郎
か舞い込みました。中村さんは、その中からカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授の道を選択して、2000年2月に着任、5月には家族も合流して西海岸の超高級住宅地に住むことになりました。日本の学界や産業界からは見向きもされなかったのに、アメリカの社会は日本の田舎にある小さな会社の名もない研究者の業績を正に評価して、それにふさわしい社会的地位と所得、研究環境を提供したわけですから。そして、いま「日本で最もノーベル賞に近い男」、その人が中村修二さんです。

本著を読んで、私は次の2点が強く印象に残りました。

第1は、独創とはどういうことかということです。中村さんは自分の力を信じて考え続けることの大切さを強調しています。研究の先が見えなくなると、普通の人には誰でも失望してやる気をなくしてしまいます。しかし、中村さんは、どん底になればなるほど、自分自身を深く沈潜させ、粘り強く研究を進めました。これが独創的で画期的な研究開発にむすびついたわけですから。

第2は、独創的な取り組みを育む環境の大切さです。日本の政府や自治体の財政事情は厳しく、お金はカット、カット、カットのご時世。多くの人々は短期的な見方に陥りがちです。中村さんのいた会社では、創業者の会長が中村さんに対して自由に研究していいよとお墨付きを与え、厳しい経営環境の中で3億円という貴重な研究開発費を用意しました。

いま、海の向こうの大リーグでは、ノモ、ササキ、イチローなどが夢を追いかけて頑張っています。中村修二さんの本を読んで、私も少し勇気が湧いてきました。



変身の“いと口”を探すまち、高野口町

[大阪事務所/小阪 昌裕]

「高野口町」のイメージは

多くの人の第1印象は、“高野山の入り口で、寒くて不便なまち”。確かに山の麓には違いないが、紀の川の平野・丘陵部にある。東西に大和街道が通り、かつては高野山詣登山口の宿場町として発展した。また、江戸時代より織物業が栄え、川上木綿の産地でもある。その後その木綿からの創案による再織から発展したパイルに代表される織物の町として隆盛を極めた。JR 和歌山線が町の中央部を東西に通り、人口は約 16,000 人である。実は、鉄道が通る織物のまちなのである。

世界遺産正式登録へむけて

現在、県等が「紀伊山地の霊場と参詣道」(高野、熊野、吉野等)の世界遺産正式登録への動き(現在申請中、正式登録は平成14・15年)にむけた取り組みを広域的に進めている。

その一方で、高野口町を含む伊都郡橋本市の商工会等の組織が10月10日を「伊都の日」と制定し、麓から山頂まで約5時間のマンダラウォークに取り組んできており、今年の秋で第4回目をむかえる。

町の資源

まちの玄関はJR高野口駅、もてなしの場としての駅前のかつらぎ館(3階建旅館、休業中、営業再開検討中)、育みの場としての高野口小学校、産業の情報発信の場としてのパイル織物資料館等、歴史と文化を語りかける木造建築が残っている。また、水関係では、農業用水確保としての溜め池、紀の川の水を農地に入れる水路(小田井用水)、治水としての河

道付け替えを行った河川もある。

いと口探し

昨年度は、小田井用水の緑道公園化も進められ、トイレ整備やマンダラストーンを設置等が行われた。また、アルパックが関わったJR高野口駅のステーションギャラリー化改修も行っている。

繊維産業の低迷に伴い、まちの活性化が求められており、以上のような多様な資源に光を当て直し、新しい視点で魅了させる取り組みがはじまっている。商工会と行政等が手を携えて、高野山と紀の川の織りなすパイルの肌触りのように“ふんわり、あったかい”まちづくりをめざし、高野山の登山口から新しい魅力的なまちづくりの玄関口へと変身する、まさにいと口を見つけだそうという息吹が伝わってくるまちである。



JR高野口駅と駅前のかつらぎ館(3階建旅館)



小田井用水の緑道公園

アルパック (株)地域計画建築研究所

・本 社

URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp

・京都事務所 〒600-8007京都市下京区四楽通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

・大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

・名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)285-2401 FAX(052)249-3925

・東京事務所 〒160-0011東京都新宿区若葉1-1・YTビル2F/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560

・九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673